

# 希望と納得にもとづく 血の通った人事を！

来年度の人事異動に向けて、校長先生との面談が行われる時期となりました。

人事は大切な勤務条件であり、人事異動は本人の希望と納得にもとづくことが求められます。希望と納得にもとづくことで、一人一人の教職員の意欲が上がり、その能力を子どもと学校のために生かすことができるからです。

## 希望に沿わないときは 事前の打診を

尾北教労では、毎年4月に転任者に対するアンケートを行っています。アンケートの回答からは、ほとんどの方が希望に沿う異動ができていないことがうかがわれます。

しかし、残念なことに、希望に沿わない人事、納得できない人事がなくなっていないのも事実です。つぎのような声が、毎年のように寄せられています。

- 異動を希望していないのに、転動させられた。
- 内示日に突然転動するように言われた。
- (通勤距離が長くなるなど)希望に沿わないところに転動となった。

本人の希望が尊重されるような人事異動となるように、改善されるのが求められます。そして、もし希望に反するような場合には、内示日よりもなるべく早い段階で、校長から本人へ意向打診を行うなど血の通った手続きを踏むことが求められます。

## 文書での 希望調査を

文書を使って希望調査を行うことは、本人の希望を確実につかむためにも大切なことです。

過去には、校長が、本人の希望を間違えて教育委員会に具申し、内示でその間違いが判明し、本人が辛い思いを引きずったまま新しい学校に赴任したという事例もあります。

数年前から、校長から、異動についての希望調査用紙が配付される場所が増えてきました。

「異動の希望の有無、希望市町、理由や事情など」を記入して、提出したあとで、校長面談が行われます。

尾北教労でも、下記のような希望票を作成しています。また、教育委員会や校長会に対して、文書で希望をとるように要請しています。

## 育休明けは 特に希望の尊重を

近年、育休をとる教職員が増えてきました。ところが、6年(新任)あるいは10年で転任させるという人事異動の原則があるため、育休明けでいきなり転動しなければならないという事例も聞かれます。

また、校長から育休明けで現任校に復帰できると事前に聞いていたのに、結局は、転動しなければならなくなったという例もありました。

育休をとる際には、校長が異動についての正確な情報を本人に伝える必要があります。そして、事情を無視した機械的異動を行うのではなく、本人の希望を最大限に尊重することが求められます。

2016年度定期人事異動に関する希望票 ※尾北教労作成

氏名			
性別	男	女	年齢(2016年3月31日現在)
現勤務校	学校		
異動の希望			
異動希望先の学校又は地区	第1希望 第2希望		
現在勤務年数	年 月 (2016年3月31日現在)		
免許の種類	小普 (1, 2)	中普 (1, 2)	その他 教科名( )
希望条件 (家庭事情、保育、 通勤時間、 健康状態など)			

## 教育委員会や 校長会への要請

尾北教労では、次のようなことに重点を置いて、校長会と教育委員会へ人事異動に関する申し入れを行っています。

◆育休明けの異動については、異動についての正確な情報を本人に提供するとともに、本人の希望を最大限尊重し、事情を無視した機械的異動を行わないこと。

◆異動の対象になっている場合には「内」内示でも言うべき途中での意向打診など、血の通った手続きを踏むこと。とりわけ本人の希望に沿わない場合は必ず事前に意向の打診をするよう。

◆同一校に長期に勤務している場合でも、希望や事情を無視した機械的異動を行わないこと。とくに、定年退職が近づいている場合には、本人の希望を尊重すること。

人事などで困ったときは、お近くの組合員、または尾北教労ホームページの問い合わせメールを通じてご相談ください。

# 子どもの発達要求に応える性教育を！



～“人間と性”教育研究協議会全国セミナーに参加して～

夏休みの8月、愛媛県道後温泉で開かれた“人間と性”教育研究協議会主催の「全国夏期セミナー」に参加しました。「ひろげようふかめようつづけよう 性の学びく性を学んで変わっていくわたしたち」を大会テーマに、3日間の日程で性教育について学びました。

2日目の分科会、障害児・者サークルの永田三枝子さん、永野佑子さんによる「性教育は魔法」東京の特別支援学級における性と生の教育」の要旨を紹介します。

## 性教育はなぜ必要か

12年前の東京都立七生養護学校の性教育弾圧事件以後、都立の特別支援学校では性教育が全くできない状態が続いているが、都内小中学校の特別支援学級では、それ以後も性教育を実践している教師が何人もいます。その先生たちへのアンケートをもとに、障害児にとっての性教育の重要性を考える分科会でした。

東京で性教育が弾圧された中でも、なぜ特別支援学級で性教育が続けられたのかに関しては、「性教育をすることで、魔法をかけたように子どもが変わっていく、その子ども達の姿に、どの教師も性教育の魅力に取り付かれ、性教育を続けてきた」ということでした。

そして、性教育を始めようと思ったきっかけとして以下のような実例が報告されました。

① 小学校の特別支援学級で、初経を迎えた女の子がパニックを起こした。「けがした！けがした！」と泣き叫び、一日中抱きしめた日もあった。② 中学校の特別支援学級で、知的に高い非行少年達の起こす性の事件、下着泥棒、果ては性交事件まで

起きてしまう。③ 小学校の特別支援学級で、知的に高い子が性の問題を何回も質問してくる。「親は本当は僕のことをどう思っているのか」「僕はどうして生まれたのか」など誕生と生育に漠然と不安を感じている。④ 発達障害の子や被虐待児が入級するようになり、生い立ちの苦しさ、コミュニケーションの障害から暴力暴言で大暴れする子が増える中で、子どもの心を支える教育が必要と痛感した。⑤ 発達障害と言われる子達の自己肯定感を育てるのに必要不可欠の取り組みと実感した。⑥ ありのままの自分を好きになれる授業をするとしたら、私が子どもたちに一番伝えたいのは「いのち」の大切さだ！と思った。

このように、障害をもった子ども達の思春期や二次性徴に関わる、心と体の変化に伴う子ども達の戸惑い、悩み、暴力行為、性犯罪に近い行動などに教師達は直面することになり、やむなく性教育に取り組むことになったということです。

## 魔法にかかったような変容

やむなく取り組んだ性教育ではあったが、想像以上の子どもの学習意欲に手応えを感じ、子ども達が変わっていく姿に触れます。以下にいくつかの報告例を紹介します。

① 赤ちゃん研究や二次性徴、大人になることを学ぶ中で、パニックを起こすことがなくなった。「私は子どもから大人への橋を渡りかけているんだね！だって月経があるんだもん！」と言えるようになった。② 「先生、赤ん坊は、けつの穴から生まれるんか？」に対して、射精、精子、月経、卵子の1回の授業で、教師を尊敬し、勉強大好きな生徒に変身した。性教育の授業の中で非行少年たちが自分の心の傷や生い立ちの苦勞を次々に語り

出してきて、性教育が子ども達の人間形成に重要な働きをすることを学んだ。③ 始めのころは「おっぱい」と聞くだけで騒いだり、笑い出して授業にならなかつたが、「おっぱいの役割」、自分の成長、母親の気持ちが変わってくると、真剣に学習するようになった。④ 自慰、夢精、性交など、それは恥ずかしいことでも嫌らしいことでもないことをきちんと教えてあげること、子どもとの信頼関係ができ、どんなことでも話してくれるようになった。⑤ 学級の中で性が特別なこと、シークレットなことではなくなった。子ども達と素敵な時間を過ごす経験を重ねることができた。⑥ 「生い立ちの記」に取り組むことにより、自分が大切にされていることに気付くことができ、学級全体が幸福感に包まれた。⑦ 発達障害の男の子がふざけるのではと心配したが、真剣に聞いてくれて、その後、女子に対する態度が変わった。⑧ 「おちんちん」「おちんちんちゃん」「フライベートソーン」を学習し、紙に描いた男の子、女の子に子どもが下着を作ったあげた。次の日、パンツを何処でも脱いでしまう男の子がすっかりやめた。

これらのアンケート結果から、発表者の永野さんは最後に、次のように述べられました。

「彼らの魔法にかかったような変容は、正に『問題行動は発達要求の表れ』であり、性教育が、その呪縛から子どもたちを解放してくれたのでした。そしてその姿は、障害をもった子を産み育てることと不安を抱える親をも変えていく力になっていくのです。」

障害児教育には、「自分が生きるに価値ある人間と確信できる教育」が必要です。性教育は、こうした教育にせまることのできるものだということを学ぶことができました。それは、もちろん、普通学級においても同じだと思います。(Y・T)